



續草庵集家米諷解一
冬秋



涙^{なみだ}い^やを^たそ^いく^ん秋^{あき}と^んい^つり^ん神^{かみ}の^あま^り
我^{われ}涙^{なみだ}の^あま^りい^つと^も神^{かみ}を^けぐ^も秋^{あき}を^くい^い入^い物^{もの}悲^{かな}
しく^く涙^{なみだ}の^あま^り深^{ふか}く^いは^なみ^だる^もあ^まり^をた^もて^ん
神^{かみ}を^まま^らひ^やら^うら^うた^也秋^{あき}と^んい^つり^ん神^{かみ}の^あま^り
ま^まら^うら^うら^うし^てる^のま^もと^也月^{つき}露^{つゆ}發^は光^{ひかり}彩^{いろ}此^{こゝ}時^{とき}

^二_方見^み秋^{あき} ^新秋^{あき}劉^{りゅう}錫^{しやく} ^三_方見^み秋^{あき}錫^{しやく} ^三_方見^み秋^{あき}錫^{しやく} ^三_方見^み秋^{あき}錫^{しやく} ^三_方見^み秋^{あき}錫^{しやく}

兼侍七夕

予^{われ}と^も待^{まち}れ^ば河^か系^{けい}の^あま^り星^{ほし}枕^{まくら}令^{たま}育^{やう}し^やら^びや^茶拂^{ふき}ら^ん
星^{ほし}枕^{まくら}の^あま^り瓜^{うり}持^{もち}し^り也^也晋^{しん}書^{しよ}孫^{そん}楚^そ枕^{まくら}不^なく^る者^{もの}星^{ほし}
根^ね由^ゆく^もと^いふ^も同^{どう}也^也并^{なら}に^依ら^ず星^{ほし}の^あま^り瓜^{うり}持^{もち}ら^ん
い^つも^もそ^のち^より^のま^まら^うら^うし^てあ^まり^をけ^ぐも^と也^也比^ひ前^{まへ}七^{しち}月^{げつ}六^{ろく}日^{にち}一^{いつ}
と^あら^わか^らる^ゆへ^の明^あ白^{はく}を^しや^しと^しら^ん松^{まつ}の^あま^り茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん
そ^のは^な物^{もの}に^して^も星^{ほし}の^あま^り瓜^{うり}持^{もち}ら^ん二^に人^{にん}

か^かし^しも^も也^也織^お女^{むめ}も^も其^{その}の^あま^り七^{しち}日^{にち}の^あま^り夜^よを^もて^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん
拂^ふへ^ばま^まら^うら^うし^て也^也明日^{あした}の^あま^り神^{かみ}と^も待^{まち}ゆ^へも^もて^も今^{いま}
長^{なが}く^くも^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん持^{もち}ら^ん也^也一^{いつ}年^{ねん}一^{いつ}度^たの^あま^り茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん
は^はか^かし^しも^も也^也七夕^{せ七夕}の^あま^り川^か系^{けい}の^あま^り星^{ほし}枕^{まくら}と^も待^{まち}ゆ^へも^もて^も
と^とも^もて^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん也^也夏^{なつ}の^あま^り夜^よを^もて^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん
敷^{しき}妙^{めう}の^あま^り茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん也^也明日^{あした}の^あま^り神^{かみ}と^も待^{まち}ゆ^へも^もて^も
い^いつ^つも^も七^{しち}夕^{しやく}の^あま^り茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん也^也 (金^{かね}秋^{あき})

等^{とう}持^{もち}院^{いん}贈^{くわう}た^た也^也七^{しち}夕^{しやく}七^{しち}首^{しゆ}所^{しよ}也^也
織^お女^{むめ}も^も其^{その}の^あま^り七^{しち}日^{にち}の^あま^り夜^よを^もて^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん
裁^{さい}ら^い代^{だい}の^あま^り羽^う衣^い掃^{はき}ら^ん也^也昔^{むかし}と^も待^{まち}ゆ^へも^もて^も今^{いま}
あ^あま^まら^うら^うし^て也^也 (侍^{しやく}人^{にん}不^ふ知^ち) 掃^はき^らん^もも^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん也^也
い^いつ^つも^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん也^也早^{はや}く^く別^{わか}る^る茶^{ちや}の^あま^り掃^はき^らん^もも^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん也^也
あ^あま^まら^うら^うし^て也^也 (茶^{ちや}の^あま^り掃^はき^らん^もも^も茶^{ちや}拂^{ふき}ら^ん也^也)

稀にこそけり古事の詞也。またいへるまうか。やはこそ
衣の縁の詞也

和帝のあひく七夕格

しらべくひの紅葉れ橋ふ天竺河はくふはなまうらん
天の河の紅葉を橋よはせむや七夕はあけの秋をこそは
平
讀人不知 天は海に浮ゆるまことりん紅葉の橋いら
古秋上
定方新 るやらしむや
古雅中
けし水くみれくは けし水くみれくは けし水くみれくは
とねらうに紅くみれくは 立田川に信
本より親王
新古今 橋入の秋がけけ紅くみれくは 天の河に信
定方新
拾遺下 れにに。かがね。天河されは。信。紅をくみれくは。今や
いへくは。今や。信也。激。池水鳥。入る二品親王家五十首一首。

たぐ中もゆきよりらり秋風を製し彩ひ果合れを

秋の袍をそきてけり かねいであつたうや海に花
着身と秋風は 控やとてま 小形を前 けし水くみれくは
おとまをあつたうやとてま 原明 けし水くみれくは
け世あつたうやとてま 拾遺 人をあつたうやとてま
けし水くみれくは 大直 織女の秋風の吹く神の比の七日れり秋あつて
おとまをあつたうやとてま 伊勢物語 伊勢物語よ。ふらひの
おとまをあつたうやとてま 何とあつて
おとまをあつたうやとてま 古里 古里にこそけり古事の詞也。またいへるまうか。やはこそ
衣の縁の詞也

たうけやひりしていふはほしく佳りきばたも
す人のねぞとらふふ 和 嵐 和 吹風 和 ころころ
しゆ葉一葉の音ふね 拾遺 下

小菴宰相中將家にて 秋萩を

萩の風の風より外れ音とあり 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
夜更也 和 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
古又後集秋聲賦云 歐陽子 方夜讀書有聲
自西南來 云云 四 悉 人聲 悉 在樹間 似 似

和歌一首 夜萩を

萩を吹く風より外れ音とあり 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
夜更也 和 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
古又後集秋聲賦云 歐陽子 方夜讀書有聲
自西南來 云云 四 悉 人聲 悉 在樹間 似 似

今ハ終萩 和 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
夜更也 和 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
古又後集秋聲賦云 歐陽子 方夜讀書有聲
自西南來 云云 四 悉 人聲 悉 在樹間 似 似

贈き大臣家二首 夜萩

秋風れは 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
夜更也 和 萩の葉を吹風より外れは 何の音とあはれなり。
古又後集秋聲賦云 歐陽子 方夜讀書有聲
自西南來 云云 四 悉 人聲 悉 在樹間 似 似

志まづにほを吹ゆるを中よ秋の音がみらさる
中よは何の志まづのれゆ也

笑白敏讀百首下 秋夕

船と浮て神神あつて夕か老れ較よや露もをくらん
志る物もほの昔の身よけのりる年の較也 例 志る跡
し及びああるれれもむの較こそわつらざるあし 志る跡
推下 秋のしははるわりのことづくに志る較より年の
くれうか 推下 秋をてといはば年ををすうに同じ。
秋のさゆの秋をてといはば年ををすうに同じ。
いよく秋の夕れ物悲うまゆへ神のあつては我志る較
かく。あををくちと也。あのをあつて志げと案ぬい
たり

入道二ふ親王家あまのいなり

月、あまののらにふくた夕雲とてぬぼくら秋のそらか
本のまよりそりく秋月の較れはくけ秋のまふ
後人不知 本のまれのまこと。ゆげくならにけい
右秋上 本のまれのまこと。ゆげくならにけい
本のまふよるねと。え本秋の夕のまこと物るれいゆ
もて出た也

二年の花

まのせの浦の尾花ふまは秋花の時を流し強くとる
蜀江の強を流し強まはよりて尾花ふまはよはは
流して流し錦うし見ゆり也 秋のせれおたよははと
咲たのちよやえんをさうをたよ 後人不知
まをらて也 引して海のかざるさやるか向あの流りて
つふ流路のまふ 後人不知 右秋上 秋 衣立田川系乃川風へ信
りて結よまのゆれ糸 後人不知 志まづにほを吹ゆるを中よ秋の音がみらさる
續草花電書解 二

聖の入は乃秋原上尾に渡る秋の夕ぐれ後教金秋
右系右ま光吉朝臣仁和寺に住持は。まはるの
おとや人のさいげん藤丸錦をまててもみよじり
ゆい返るよ

春れ花のこし思ひて秋の萩乃何分とりぬらうと
かり。萩乃錦も面白きふそてと人の也

秋藤れ花の錦よたらうらん。花れ萩のやりあはれども
花のほくくも面白し。今其の四節をくはくも。萩の錦
と萩のふらうぶきをくふ。まよとてとん也。まららも。あり
と。錦の縁乃詞也

聖護院二不親王家とて 朝の草花

多味野の朝乃萩や小萩系風まのなれ萩拂らん
幸 多味野の幸乃萩乃小萩系を母も風を結ぐと名

をこそとて後人不加 朝乃萩 秋の中を朝乃萩の萩を
かく思ふ君があふふらうらう。文後四の小萩れ萩乃風
を結ぐある同。朝乃萩乃萩と拂つら。萩乃風結
束をまてて拂うと也。け萩の字は。同乃の也。萩乃萩
乃萩とて同。おはるゆ人朝乃萩とらう

秋の萩乃花よりけはの煙まで小田守神よ萩そらうらう
秋の萩乃花の舎向すをさけり秋の萩乃花とわらわ
る。ちうりふれ萩乃煙までゆ人。小田守神。萩の萩乃
らうらうて。まわれとてらう也

秋の萩乃花よりけはの煙まで小田守神よ萩そらうらう
秋の萩乃花の舎向すをさけり秋の萩乃花とわらわ
る。ちうりふれ萩乃煙までゆ人。小田守神。萩の萩乃
らうらうて。まわれとてらう也

後人不知
古秋下 本奇志本のらん紙よりぬ。比奇は。草花の葉を後
る。のる色をわく。多。千草の盛んは。花もさぬく。れ色ぬ。
すの色乃。ぬぬ。おれさく也。本奇のらんは。千の品
乃。候。は。比奇の。子の。まに。より。て。より。

猶三位一州（あまみち）と。京極（みやこにぎは）旧館（ふるや）として。人々奇後作（あまのあき）し。

余（あま）を。草の。む。

續後三位（あまのあき）子（こ）わらふ。西無哀傷（あまのあき）初（はじ）まむ。

古里一紙（あまのあき）入（い）れり。いどりの一村（い）為（な）れを。志（し）げし。ん
れ（れ）り。人の住（い）り。古里（あまのあき）さし。今（い）一州（あまのあき）志（し）げし。ぬ
ぬ。まむ。一村（い）す。たの。志（し）げし。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。
人の折（い）く。か。して。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。
一。年。を。つ。つ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。

わらう。て。本奇の。か。虫の。音れ。志（し）げし。ぬ。まむ。ぬ。まむ。
ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。
ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。ぬ。まむ。

續き大納言（おほのくろ）家（い）五首（い）。 薨（あま）。

秋（あき）の。舟（ふね）は。尾（お）花（はな）が。ま。く。時（とき）野（の）乃（の）。お。同（どう）じ（し）ら。か。ま。く。
ま。く。か。ま。く。か。ま。く。か。ま。く。か。ま。く。か。ま。く。か。ま。く。か。ま。く。

ゆき。き。大納言（おほのくろ）家（い）三首（い）。 草（くさ）花（はな）風（かぜ）。

秋（あき）風（かぜ）よ。ま。秘（ひ）く。尾（お）花（はな）を。満（み）ち（に）の。よ。せて。い。ゆ。り。は。な。ま。む。
秋（あき）の。く。ま。い。ら。の。川（かわ）べ。を。吹（ふ）風（かぜ）よ。よ。せ。く。ゆ。り。は。な。ま。む。
秋（あき）の。く。ま。い。ら。の。川（かわ）べ。を。吹（ふ）風（かぜ）よ。よ。せ。く。ゆ。り。は。な。ま。む。

かきくゆ人^ほの^せに。帰ちやも也。本^きの^あい^まを^うと
「おてゆ^はぬ^は信^しり^もた^らな^け。新^しの^い尾^のた^のま^いく^を
みる。」「ま^まく^ゆの^信と^まあり。奇^ま妙^のの^あ奇^のれ^おね^を

入る二お親王家五十首奇よ。 麻

こい^けの^れ妻^はに^しつ^らぬ^おれ^よい^あぐ^との^まや^さい^りつ^と
麻^の何^のの^あと^ちを^も物^をれ^び。お^れよ^う長^さま^いり^よ
東^もま^るゆ^ぎま^まれ^ど。妻^りの^あり^ぬ夜^のい^つさ^は
長^と物^とも^あつ^しん。さ^れど^もさ^はい^しん^よま^たと
づ^のり^おの^り。外^の物^をを^らふ^まの^あり^はま^まり[。]
我^もむ^ろの^福是^し。衣^のち^がれ^とぬ^おが^えら^うふ[。]
ま^つて^麻の^信を^まけ^いわ^らぬ^れお^の物^出し^まさ^之
ゆ^いと^まの^まま^らん^とま[。]詞[。]あ^をは^けて^時
る。

夜鹿

衣^のあ^りの^ゆと^あら^うさ^ゆの^あら^う妻^のい^つま^れら^うと
いつ^りも。妻^のほ^れな^くあ^りぬ^い。麻^も出^らう^るあ^るふ[。]
ま^つて^衣の^あら^うは^らう^はら^う。馴^とく^妻の^何と^は
ま^ちた^れぬ^も。夜^の寒^のは^い。妻^も同^じに^休ふ^こも^有
づ^まあ^らぬ^人の^情を^して。ま^つら^うと^妻と^も麻^のあ^らお
ゆ^いち^の候^也。一^の詞^よあ^らぬ^人。
深^正平^宮三^首 月^茶因^麻
あ^らぬ^人の^まま^らう^あま^れ月^教母^らを^妻と^れ麻^とゆ^ん
こ^らん^とら^うあ^らぬ^人も^月衣^らぬ^一入^また^てゆ^ん
あ^らぬ^人の^あら^う。麻^のあ^らを^まけ^いわ^らぬ^い。
あ^らぬ^人の^あら^う。麻^のあ^らを^まけ^いわ^らぬ^い。
あ^らぬ^人の^あら^う。麻^のあ^らを^まけ^いわ^らぬ^い。

おのれのいふことも

夜虫

同守はうらまひのしやむれとていふ。毎よねはまどを
人らにわかれぬ。夜虫の宮守は宵くぐらん打も移る
かん 作物 ねはぬ。夜虫といふし車かかへ。秋の虫ふ
人まじりしりのあまとも也まじりて行ていともうら
全俸 伊勢物語に伊勢とていふ也。よらうくぐらん人を
夜虫といひ。定らうく。宮守の打わらん。戸のあけぬ人
あまといふ。いとわらうく。ねはぬ。そこそ行ていとも也
茶侍 与守貞也。あまて。虫

部類云。五位。源貞也。今川伊豆守。上総女園公範

子。風雅。新拾遺。新後拾遺。新續古今作者

吟虫は候のまや紅れあまの野らねぬのゆかき

吟のあまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

あまののむらみ川つるのほらねぬのゆかき

續草花巻

二

山家物語

おののまのわらひのつらふかよ。新なる海を新丁乃こぞ
えりさのうの座よ。夕暮れをく。座の右をも丁へき
ぬやうん。海を新道く。くくくくく

入道ニ不親王家五十を新し

序のく秋風は荒く。尾を教志げく。れ田井の夕暮る。そ
免波をく。よそく。れ。尾を花ら。く。あつく。れ。田井。み。所
人。ま。し。初。志。は。く。の。田。井。に。秋。風。吹。く。尾。花。ら。く。夕。暮。れ
の。ゆ。か。ぬ。所。は。吹。く。と。つ。う。計。き。い。く。わ。る。人。さ。ち。り。滴
田井。常。所。也。免。波。乃。く。下。也

首世望月以會よ。夕月を

縁佐ふ秋れんをいう。夕月侍あろ。夕月を

ゆい。い。休。く。ゆり。也。物。出。く。ゆり。作。也。ゆい
う。秋。く。は。た。く。い。ゆ。も。あ。み。を。み。く。く。く。夕。暮。れ。也。海。を。新

縁とむ秋ら外の宿り。れ。新。あ。ら。く。も。月。の。清。く

秋の四歌
秋の秋上

か。が。く。く。く。の。ま。秋。の。を。ば。何。く。く。く。な。ぐ。さ。い。べ。夫
と。夕。の。あ。つ。さ。秋。ゆ。く。こ。秋。く。く。く。り。物。色。自。堪。傷。容

秋。心。作。秋。心。前。詠。愁。乃。字。ハ。秋。心。と。か。く。也。こ

あ。く。ゆ。く。秋。の。つ。く。く。也。愁。の。後。ハ。海。幸。し。あり

九月十三夜。秋。軍。家。三。首。奇。し。月

このく。夕。か。か。さ。い。く。れ。く。く。月。の。あ。ら。く。で。時。く。く。く。も

夕。か。か。く。も。入。よ。非。昔。く。也。正。命。昔。よ。花。も。あ。く。か。か。く。も。乃

月。は。は。の。う。で。く。の。え。れ。く。く。は。も。く。新。て。京。色

く。く。く。く。白。也。け。く。く。ハ。夕。か。か。く。も。の。時。く。く。非

想。伴。の。入。り。晴。く。月。の。く。燈。伴。也

秋。心。と。か。く。也。月。か。く

とゆらさ 秋の夕に高くうらふ家板の月これよ乃
物と見るとも有か 権太純言教家の
ま本月 高懸列宿稀

月圓
社律

入道二品親王家五十首より

いふめて月の桂のもと一かいたもたあま福と親とみゆん
月乃桂つぎのなご一平ちかふ。うの親乃つらして天
地四方よあまね思おもふと来きふ也。しつと平月乃うの
えつらふ後也。月中。桂。西多。故宅。梅乃次。おとら

聖月を

いふりや露けさゆぐとわらういふはま月やよひん
朝あそんく信しんこー里りををああくくいいれればばいいとと海うままおおそそ
やちらるれん 伊物 け里は。深さ平の里也。里乃るやぐ。
あちげさゆぐ。あまのつらば。何のふまもあまのつらぐ

深さ草葉よけうく。月の沈んそ也。沈んそに信を
そこあそ。人の信也。月のさや桂んそ也。いづも深さの
なごさへ深さゆつらよ。おんそいづも草も深ささう。
いづも深也

等持院僧を大伴家三首より 野月

いづもねやささの拂ふ秋風よあひゆりて月ぞやまほら
早くままりりるるるるななんん。ああももかかゆゆめめんんずず。ややああくくいい。月月の
明あくくふふううけけるるゆゆ。ああももよよくく見見ゆゆららぬぬののううりりてて流なるる。
風かををかかりりて。月月ののささああめめ。ささををばば拂はいいととれれどど月月
乃のややるるああををばば。ののここししららとといいふふももあありり
九月十三夜園白殿にて百首よまてしきりて
月乃の何ぞ

何ぞはるか月の神れとよつとをさげやう月くれ

^本春ハ雪ハ... 冬ハ... 秋ハ...
 神... 月... 陽... 遠... 是ハ常...
 中... 月... 又... 一... 物...
 ... 二... 一... 二... 一...

護院二品親王家五... 燈... 映月...

映字彙云。明相照也。何... 二... 之... 也。

てり合ふ也

... 秋... 小... 岩瀨野... 越中也... 其... 觸... 袖中...
 ... 後拾遺... 杖... 乃... 杖... 杖... 杖...
 ... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖...

續

十四

あつちの炭入り白雲はる間もつる 秋のまは八月十五夜也。
萩のくれきのいそ清さよきたうつられが力のらうも
さうりしにあつちふみゆり也。

將軍家の湖上月

ふれ海や海風吹びすじ力の氷をこゆるあはさるみ
月のえり水さうつらさを見れば水もこちり
そらゆりたるふ。浦風吹く。波のもつらされがら。

氷乃とよ。波のこゆるゆりたる也。例 氷乃とよ。小川の
磯いそより信乃月の氷よもも存也。後成に女 氷乃

深きのおくはそくく力の氷よをさそえちり。拾五
素向之千里。漂々氷鋪しかり。水路凝氷雪ハ

五月十夜ハ 氷乃とよ。水乃とよ。水乃とよ。水乃とよ。

いふて歩れ上をかふん月をきねれよどのうらま

ふ柳の浦よ。力のとむい。氷のどくさたが。毎と氷のど

を過かす也。例 すいの海れ氷乃上のあはれうらみの氷乃後
さそこくふ也源仲務 川百 月さゆすいの淺あやれから流る

氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。降信 氷乃とよ。氷乃とよ。

氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。名考 氷乃とよ。氷乃とよ。

氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。名考 氷乃とよ。氷乃とよ。

氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。名考 氷乃とよ。氷乃とよ。

氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。名考 氷乃とよ。氷乃とよ。

氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。名考 氷乃とよ。氷乃とよ。

氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。氷乃とよ。名考 氷乃とよ。氷乃とよ。

新編古今和歌集

卷之二十一

日埋まらるる匡房後 難波のや萩のつらふのしみ

てきられ枯らん後冬 萩の朝来はなむね

氏子の家會よ 何月

ふられ水のけいゆれきみしてきそに波を思と月より
水のけいゆれ水より流り流也。水の流りまきまでは
いそみくをいそむ。水の流をこゆるは。流のそよよ月
の思おもひて。白き波と。川よりきく流りまき流也
とゆる也。奇さい業まかる奇也

入道二親王家又十首奇よ 月夜夜

流ふ萩れ萩よもあそハ埋きては虫音なり時分なりけ
新編古今和歌集よ入。あそまも埋もくづり。流とあ
し。中よりそよよ。月夜虫の音も流りまきりて。一入たう
く関ゆる也

九月十二夜お軍家よて 月夜夜

我袖の露と暮らる月夜お軍家よて。老れ涙をどしどし
あそまをぬるとは。あそまの月のこころけりおとれい。あ
そまおれい。いづれもまきも。ぬるく月よりつるまき。我袖
のあそまをさへぬるとしよあ也。老れ何しけりては涙も
ふらるぬ。月をさへぬい。いづれ涙の流るを。おとれ
さうに。神より月のけいりさうに。涙とさうさう也
まきりく。とあそまはあそま。わたり神のあそまをぬていぞ
あそま。上しげ月つき清きよ 萩のあそまの流るは。いよよあ也。あそまをぬる
秋の神風あきのかみかぜ 萩のあそま

八月十五夜お家よて 萩の月

あそま月れ萩のあそま。あそまのあそま。いづれあそまのあそま。萩の
あそまのあそま。いづれあそまのあそま。萩のあそまのあそま。

古今和歌集

卷之二十一

をくから天川とてはる舟の如いれ志はくく 仔細 天は風
 神雷白く静りとしそ家標乃有明のそ 拾遺 中 月乃
 まは秋風さむく天は系とらう秋月乃有明とては
 くら 女家法 中乃に何人乃二度世標とてええ。浮
 世みいてどやらういし。いほのまらう。けしをこえて。ほ
 せしおほけの終らぬ月の海ふづら也。秋ぞあぞ文字。
 いでけら乃づるの字よんをけぐく使其高霞孤 フシテ
 朕明月 ソレ 獨 アガ 拳 北山移文古 乃んれあぐく 文後集

古寺月

晴る長ハ八まをせれ終はは横川の冬にすめ月
 秋よりその八まをせむくは横川れ水や流さるる
天啓抄製
彩吉雜下 天乃ハまをせとよふとれと。その終はく
 晴る舟月秋乃すめら。横川のわくれさるくさ。お

いひやぐく

九月十二日 秋風白敷月百首 寄後さくさく

月か秋

うき祿すら秋れ末ハもさるとりお月をこさ
 秋の末にはねくさる月のこといいて。中づらる也
 月とよを。秋乃本もよをわらゆへ。しつと
 ーこいつり

聖護院二所親王家うそ 悟月

八月をくくぬくこれそとそや夕はけきも祿をやゆん
 八月乃明方をねみく。夕海乃もきをやゆん也。
 神明方とす。月はねいひとしけら也。を明
 方乃明方を也。をい助まらよく云詞也。玉の戸を
 をめくこのせまより神代の月れ。秋そ移す 拾遺 彩吉雜

芦の屋乃かむのさちやの天の戸を押明方ぞくろ
はさしい一巻 順徳院様
古香上

九月十三夜冥白殿にて 月茶酌 あき

月やどち次田れ面よとと眺れ氷より立明かこのそく
月の光のほくくうらうらなさあう氷より眺る立
中し也。相方の眺る立何分をうら。月の氷はか湖
と月よか

民アの家一日子首寄よ 眺

不のうちる田面れ方立眺の教あうまて明は長す
ま方の中よは。田面り眺し。不のうちるしに。長の明ら
くしとくういて。ま方もくし。眺るねもあうらく也。立
眺は田よまましく括る也。飛立し飛。茶の寄は飛立
ちり

二条入道大納言家三そく 湖月

堀 くま 志がの海士人秋のよ月をそれる袖あしと
湖 うみ 多ゆんをくまねい。袖のうらうらまのまきと
月をえくいのまねあまも。涙をりまわして。袖は治
とん也

野た大臣家月五そく 湖月

埋 うめ ろく海をれ水とあうりて浅茅がましたねそや
浅茅たがふ埋まこりほむのあまねも。浅茅が
よまて。月の中よりまねい。あまあうりてんも也

湖也月

布施 ふせ 海よ屋よ入はく池月の光やまげむとく
布施 ふせ 越中也。屋よ院月をまうとくぐみうとく
高山 たかみ 表 へ 裡 り 千里 せんり 雪 ゆき 洛水 らくすい 高底 たかぞこ 兩顆 りゅうかく 珠 たま 朗詠 捐 けん 金 かね

志高の御言解 二

於山^ニ沉^ル珠^ヲ於淵^ニ 文選東都賦

海^ノ邊^ノ月

おのころは海^ノ邊^ノぞうかよふとら海^ノの真^ニは塩^ノの粒^トはたよむ

月^ノの出^ルより。波^ノのしよはよえり。何^ノのこほりもく

海^ノくさる^ル糸^ト色^ト也。塩^ノの粒^トはたの向^ニは事^トて。畢竟^ト

塩^ノ乃^トよ也。引^クて海^ノの仲^ニは塩^ノの粒^トはたよむとあつ

えり物^トくさる^ル方^トもふ 読人不知 古雅上 和^ノ方^ノの浦^ニは

り塩^ノの粒^トはたよむとあつと我^ノ身^ノのよもよも 古雅下

古集^{五言}五言^詠百首^奇 江清月近人

野^ノ曠^ニ天^ノ低^ニ樹^ノ江^ノ清^ニ月^ノ近^ニ 宿建德江 孟浩然集 水の氷

の清^クく流^ルるゆへ月^ノのよくうけうて 杜詩 江月去

くうまれば人^ノは近^ニと 杜詩 江月去

只數尺 卷十とりの新也

海^ノ士^ノ人^ノ粒^トはたよむとあつと我^ノ身^ノのよもよも

難^ク波^ノの粒^トはたよむとあつと我^ノ身^ノのよもよも

うけうゆへ月^ノのよくうけうて 杜詩 江月去

公^ノ君^ノと

入道^ニ親^ニ王家^ニ五十^ニ 奇

あけては煙^ノいさよ 海ノ人ノ月ノ如ク

あつと我^ノ身^ノのよもよも 杜詩 江月去

満月

心^ノありて風^ノぞ吹^クく海^ノ士^ノ人^ノの月^ノ如^クと

吹^クくいさよ 海ノ人ノ月ノ如ク

あつと我^ノ身^ノのよもよも 杜詩 江月去

とわたりて 海ノ人ノ月ノ如ク

將軍家にて 海月

吹風の使待まぬ由言れ戸より月こそはる人後か每人
舟人吹風の使を結てわら同く。月乃出され
海とれ明くくぬ海をた。月乃出されて由言れ
戸をわらぬ也。いれぬ海か舟人梶とそえり
清もたぬぬえりるるれ。の初をさるる也。はるよ
本より未考の月乃出れを。夜海は月よはるこ
ゆゑもさるる出る舟人 保家長法
捨ま下 此よりより出るれ
兼空上人よりより 海 月
みまにわらぬも ま 小舟あがれて月乃出るこ
堀にこぐ柳か小舟にたぐる同く人より意に
か た 月をさるる。あふこ。わらぬ。舟とさるるあ
あゆよこさるる也。柳を小舟に正し舟不遇さるる

常実白殿十五日 河上亭

河風の波ふり交わさるるよほてぞくはる路に
音はさるる物なれども。風吹きて。いさく
舟の音同く見ゆるは。音れとに。わらぬ
中より。面白風音也。わらぬ。わらぬ。わらぬ。
神々。音はさるる。音はさるる。音はさるる。
一首の寂蓮。音のいさく。音はさるる。
音はさるる。音はさるる。音はさるる。

楳のま ま 楳れをさるる。音はさるる。
新洲家路もさるる。音はさるる。
か か 楳のをさるる。音はさるる。

ふれども、里まがては晴中なれば、けら川の風景面白く

権舟二心親王あらいめぐ

権あらい

志りの秋日記いふとて、終り也。其方のまがめれあさぐさの秋
をかたまりま。二院あり。きかれらうてきては、ぼくといれど
とくちからぬいよ。又まがきのあさぐさに、きかりゆきく
まをるをいふ。此きかりゆききかりゆききかりゆききかりゆき
ふりくちまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
とて山里れあさぐさをまきまきまきまきまきまきまきまきまき
とあかたみまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

わくまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
かくりくまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
侍豊の日記 出のまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
川よむ 出のまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
風中 出のまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

九月十三日、兵侍軍家こそ

権舟あらい

源平のやむとちり、里の秋風よなまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

権舟あらい

権舟あらい

かりあざんやいそがこげん 伊勢 深草の里れあれて
 野のぶらり成るるふ。秋風吹くさびまゆ人ぞん人
 中ん。うけりの衣と打也。秋の衣は短き衣也。
 ぶらりあざんとあち 本奇 詞くしうてしうり
 秋の衣は短き衣也。今しれたおし 里 今しれたおし
 秋の衣は短き衣也。 後之位度 荀子曰子夏衣若
 懸雞。車文類聚。子夏家貧衣若懸雞と
 あり。

おあどあしを

秋はひしすぐれ糸ののど 赤人 秋はひしすぐれ糸ののど
 秋の衣は短き衣也。 赤人 秋の衣は短き衣也。
 乃ちけり 後人 志のたに 後人 志のたに
 映月よも。長月とらり。 秋 秋はひしすぐれ糸ののど

麦のぬれ氷と春日風を 赤人 麦のぬれ氷と春日風を
 麦のぬれ氷と春日風を 赤人 麦のぬれ氷と春日風を
 乃ちけり 後人 志のたに 後人 志のたに
 映月よも。長月とらり。 秋 秋はひしすぐれ糸ののど

續草子

續草庵和歌集蒙求諺解

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

冬

初冬

ふいふふいふれれすすの秋は色をのこらぐと吹おがじれ風
冬のもてても。秋のけはるれが。ふいふまご。吹られ秋の色
しうらゝぬを。ももや冬も終が。秋の色いのこを
ゆがさごと。木枯の風が。木は葉を吹らしたをた
しひんあり。秋の色をば。紅葉をけりてしうら。木
枯とつら風が。木の葉を吹うすゆ人のうらもまは
一首。木を吹うして。落葉さすうとつらこ
り秋り

後也

落葉

あやにほりともくちやら風うつらぬ絶られ落葉あし
ふ風の吹るにさよしのしらういて。風が吹ぬる
地への落る也。陳簡齋が詩。正華落葉をよに出る
らん終くー

冷泉宰相落葉花園にて奇くもまじり何同ー

ゆき

風いそいでしきりつらと落おれしをほく。ふは木葉を
あおねり。東鑑米日をかさねて。けしとほく。木の葉
かなふ。風いそいで。ゆきちく吹らして。どつる葉ぞ也。
けしとほく。あまねの。かをほく。ほく。をころもたり。
さしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。

物を指示して

りくさけしとほく。あまねの。かをほく。ほく。をころもたり。
ふは木葉を
あまねの。かをほく。ほく。をころもたり。
さしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。

民の家を

何ぞ

けしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。
あまねの。かをほく。ほく。をころもたり。
さしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。さしとほく。

善書

三十一

のしん。たつ。事。この説はよくある也

入道二ふ。親王家を十そよ

し。や。又。あ。め。り。わ。ん。冬。枯。れ。藤。の。し。ほ。枝。よ。氷。は。氷。露

藤の葉あまよわん冬枯れ藤のしほ枝よ氷は氷露

みよ後人不あ
古秋上 秋のうらえい。去年の枯れゆく枝也。秋

藤の古枝よさけら花もれはかろかひ忘れさるる

古枝よさけら花もれはかろかひ忘れさるる

み。い。は。り。の。冬。枯。れ。る。古。枝。よ。こ。ろ。ろ。あ。ま。を。ん。花。も

今又これとあはれんとも

お軍家と首よ

冬草れ枝のそよをのそ花枯れゆがれのかれ文と妙をも

枝小節例のぬを流しんてやまとの

枝の小節は秋の末の人はにかし
ま本 草の枯れゆくは

花すくたあもてま移く神くえんゆん在東孫梁
古秋上 枝

のそり冬まれあまり枯れれい。今は尾花の枝

づりあきて世外のまら枝の皆花もわんた也

小菟宰相中將家よん 霜

あ。枯。れ。朝。の。あ。り。ま。れ。と。ま。い。家。よ。と。藤。の。花。も。れ。も。る

昔の枯れぬい。藤の移る花もれはゆりくは

ゆりちり。あつと藤れ花の移る花もれは

あまあまのあかり

賜さ大長家小節花よをてつる

と急よ

日

讀草上卷

おれとみ... 日ておの本...

おれの人... 風の吹... 秋の終り...

くくゆ... 秋の終り... 風の吹...

くくゆ... 秋の終り... 風の吹...

くくゆ... 秋の終り... 風の吹...

巨方上人... 社三首...

冬夜月

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

冬月

おれ面... 秋の終り... 風の吹...

冬月

冬月

故人のついでと
冬に落葉して月のまろみ又和まじも
杉木の枝れきりきりきりきり枝の落葉とゆ人を
来くもくれやあけ月をさる也。深ふる月を
伴ふる也

は積寺昌宗上人坊にて 湖冬月

と月れ氷のいままなれも信をうらなれ信風を吹
氷のいままなれ信をうらなれ氷乃氷をばは
きゆ人信の打おんと。打出の信よりいりきり也。
信風より信のうらなれ也。信風にさる
氷のいままなれ打出る信やまの神花
うらなれ也

冬

難波方橋よりいりきり信のいままなれ
信風より信のうらなれ也。信風にさる
氷のいままなれ打出る信やまの神花
うらなれ也

推業

冬に落葉して月のまろみ又和まじも
杉木の枝れきりきりきりきり枝の落葉とゆ人を
来くもくれやあけ月をさる也。深ふる月を
伴ふる也

半響の松をい
ちくちくとも。今又秋がさうぬかゆる重くも木
ついで。そめぬ事をいりり
笑白飯小粒をさぐりて奇よまはし時

松霜

今如くも人れゆさくの松もほよのまはちのまはつと松
真間継松まゝまゝ下総也。何れをも。茶方より有りまよ
いけてよし年廿一かたさうやひつれまのつ
まひしをりしれどけりまよ夜かまよか衣袖も
ふんろくちくろくろくやそのよれまろく継り松霜集
温庭筠。曉行詩。雞聲茅店月。人跡板橋霜。
此詩のおく。松乃く人ろまはした。松のまろくくも
物されども。今如くいまも人のいれまろく一足履くたく

して。松沖路。松のまろくたる也。松上早朝の氣氣
あり。朝露不到溪陰處。留得橫橋一板霜松霜
格下 此詩乃くいれり

冷泉宰相夢花園して方よままき一河

流氷

流津漱める。流くよものありせば何をたよりに氷初ま
流はせの中はれよものありしををど我意の測流
よもさき後人よき流り志いなうろく雨は。氷少くは物
つらた。少のよものありあり。氷初まぬる。中なる
よものたくり。何をそくろりありて。氷ういべきそく也

河氷

若ね河せと入りり氷りてまろく流れみまはりき
若ね川せと入りり冬は流つてまろく又りかのまよ也

多みてわかれ我はわたりなほうたはぶらうを路程
たれいよそのの雪をうらむかきいとまう也

石上座主僧正坊して 朝雪

のり

残れく子里れふとつなげられおののそと眺めり

あふたはふふを方のととも雪のふりていよくいゆれ

おされは千里の外れふととらぶくくいゆかたうらた

雪入りおのよく眺めり侍也。城々飛雪千里楚。陰

山千里雪惠大 宗 雪晴山脊現幸八元 三作

或るに二條宰相尋おつて弁讀まし河

遠山雪

降雪は懼れてふらふを方れ客のゆきあふ影まよふま

を方れ客のゆきあふ影まよふまを方れ客のゆきあふ影まよふま

ゆきの懼れふらふを方れ客のゆきあふ影まよふまを方れ客のゆきあふ影まよふま

色うそ希て雪間よりよく見ゆるよ。雪は懼れり

りあふれり也

け一座大殿今園白の法座を。P作奥の

とをわきふらふの浦わきわきま行の信を

天鏡のささくあそくしてけしほ

浦わきわき信の信をのりこくと法製を

くつらましくけし遠山雪奇よりうらうさう。大殿

へれ物書のせうけしけしを拜尼こ入侍

言れまも及びぬき。大殿のゆき也。新河法呼

の奇をゆきあふりて。詞をも及びぬき。西向わ

きれ浦わき大殿の法座をゆきあふりて。雪をうらむ

やめはらまき事まれり。あはれをゆきあふりて

ありと也。和奇の浦松の。和奇の奇を所てよ
 修也。流をかくるは。点瓜かけらと也。湯製
 の奇れん。昔、類いあつても。あつても。い
 れた。と。え。後也。け。名。奇。あ。ん。か。け。し。流。也
 かし。く。み。ん。う。ま。い。さ。れ。也。大。級。へ。新。書。を。下
 小。部。河。を。ら。奇。の。奇。を。し。り。し。き。由。に。あ。り。い
 奇。を。さ。ひ。け。か。く。あ。り。て。大。級。へ。奇。を。さ。ん。せ
 たら。う。也

ぬ。奇。れ。ん。と。も。く。修。り。ま。せ。ら。し。り。終。り。流。を。ら。り。か
 へ。く。あ。り。し。ん。ハ。脚。字。り。て。く。さ。く。也。と。く。さ。り。小
 く。成。ぬ。ま。だ。は。く。づ。え。の。も。と。え。は。く。れ。り。古。部。大。級
 乃。吹。峯。より。り。て。あ。く。せ。え。あ。げ。天。流。す。て。り

及。一。事。と。雪。の。ふ。れ。ぐ。く。ま。く。修。り。ま。り。た。り。て
 ころ。下。句。ハ。奇。道。を。し。り。新。し。れ。か。ら。湯。製。と。修。
 一。事。を。修。と。し。り。流。の。島。の。流。の。後。と。し。り。湯。製。
 勅。多。分。修。修。一。事。也。雪。の。ふ。れ。あ。り。あ。り。し。り。て
 っ。い。り。り

大級内返一

中。并。ま。も。照。と。ん。ら。り。ぬ。年。さ。く。あ。り。し。り。雪。の。ふ。れ。の。か。い。と。い
 年。高。く。し。り。流。の。さ。り。た。り。り。同。し。修。老。の。後。也。
 劃。の。投。え。ん。や。し。り。た。り。身。の。中。く。く。年。あ。り。た。事。の
 くら。さ。古。長。さ。れ。も。し。奇。の。も。と。多。年。の。後。年。の
 修。り。り。事。を。し。り。あ。り。し。り。雪。の。ふ。れ。あ。り。し。り。湯。製。が。ね
 事。ハ。中。の。奇。難。部。と。し。り。修。修。の。あ。り。し。り。と。い。の。つ。い
 は。と。り。同。也。又。あ。り。の。さ。り。り。也。修。の。さ。り。也。奇。を。修。

了也。物のうらみ。あるおしに。とんてつり事すあり。しん
 ちり。しん。ゆらさ。ゆらさ。是引のふりうい。有々。す。わい。あ
 りぬ。古誼。みげさ。な。ば。う。わ。つ。つ。く。是引のふりうい
 かく。成。な。づ。う。也。古同。ま。ま。年。す。ち。成。の。つ。く。修。多。じ。う。い
 あり。事。す。い。ん。雪。れ。奇。禁。中。ま。で。雪。え。わ。げ。津。敷。と。え
 枝。下。し。よ。う。と。も。さ。う。う。り。也。思。と。し。ん。雪。の。え。う。り。思
 と。也。雪。の。ふ。は。釋。迦。如。來。雪。う。り。て。修。多。奇。事。と
 ち。り。又。わ。り。ひ。り。と。い。し。人。雪。を。と。ま。く。集。り。く。ふ。を。作
 事。す。い。わ。れ。い。詞。の。縁。と。て。雪。の。ふ。と。は。げ。く。り。雪
 ふ。作。る。事。深。氏。物。結。清。少。納。言。枝。双。弁。け。り。者
 氏。々。の。家。一。日。子。さ。よ。雪
 ふ。里。は。後。つ。け。が。く。う。り。あ。り。し。と。自。心。し。人。と。ま。し。れ。や。雪。の
 ふ。里。は。後。を。つ。け。て。も。い。か。た。れ。や。と。深。く。雪。の。ふ。り。也

大體乃雪にこそ人しんを結ぶれ。か。然。の。ふ。雪。と
 は。人。と。さ。ふ。ま。さ。き。も。う。ん。人。を。結。む。も。と。ま。ん。一。向
 へ。さ。い。結。て。奇。人。と。深。き。雪。の。侍。を。よ。ま。り。也。今
 日。し。ん。人。と。さ。は。は。雪。の。面。白。い。今。日。の。必。人。乃。あ。り
 べ。也。と。結。定。して。結。を。と。り。ま。し。れ。や。い。ま。さ。か。は
 ます。れ。や。い。と。る。ゆ。ら。れ。は。と。ぬ。く。結。も。く。ま。し。れ。様
 也。う。ち。の。う。ち。の。め。侍。の。あ。り。也
 お。ち。り。ち。り。を
 赤。度。の。深。埋。し。ん。深。く。な。れ。指。あ。り。つ。ま。か。つ。か。あ。り。も
 赤。の。奇。も。大。雪。の。侍。也。し。奇。も。同。く。大。雪。の。深
 ら。ま。を。深。埋。つ。ば。雪。の。す。り。れ。ゆ。り。行。か。く。落。く。指
 乃。わ。り。ん。ぬ。と。見。れ。は。又。ハ。降。埋。し。埋。り。は。又。落。り
 事。し。つ。く。度。う。り。と。也。深。き。雪。の。あ。り。事。と。ま。し。

雪鷺カス睡ツ眠テ 坡詩人玉 晴雪落長松社 長松落

雪鷺カス睡ツ眠テ 一層十四

何を雪

雪野河たたりふかこれけさく風雪ハうり所
みるく水の泡也。心毒利身急しおたり。滝のふり落つ
あしたの泡乃もたつらか。風乃雪松吹まじり
見まへもつりくけさくも也。吹まき冬月よ。

何を雪

田子の浦や雪をたたりぬれぬれ新みくそ信もいんくまきる白雪
うりのさねの教乃。田子の浦よりうりて見ゆか火さね
れ雪も。信よりうりて。信れよに雪のうりて。雪のうりて
外のあも。信のうりて。信れよに雪のうりて。雪のうりて
みゆか也

冬さしし雪ぞうりけしはし。漆にうりて。雪もいんくまきる白雪
漆にうりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
うりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
のし降けし也

何を雪

那波のし紀路のさねを。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
那波より。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
よんけい。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
より。紀路乃遠山の雪は。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
信まは信のこと也。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
那波をより。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて
行道されし。紀路共。紀路の雪も。雪のうりて。雪のうりて。雪のうりて

橋の上の雪

と青く人をもたれや降きよと翔へまらん字は乃移姫
 引ひらよ衣よとまこと衣りや我を結ししものり姫
 移姫の跡長けをもとらん人なればしるや明けを
 りはけまぐさまきまらぬもその人かともさ結ひけさ
 りはけ雪れ血よとまあけてもやとよべさとも。雪ゆへり
 結しんと也。鄭繁が瀨橋の雪の糸を愛せりとも
 こりうさきよや移姫の幸よ命水々春日よか

入道二品親王家五十五歳

ちんと朝法ともみねれをやげ田の森と人をも問ふ

若すばといまゆをけのふれは田れ杜乃秋の神

僧於清流
詞社

君とぬべいんはまことついで田の杜も秋をてこ

そいもちうらちとねのえさつをだ。あうもてとよあ
 とももらん也

雪路日小野よ戸のりてゆりよこもたつ乃みとれ
 川流。つくとつたからんれりゆりよ

小野郷和名抄愛宕郡河海云小野の原也

小野郷内大魚也惟高親王乃由跡土人云大

魚と野村乃東山流よ有一本松所其地有

石塔惟高王御墓也惟高親王の小孫よお

ひゆりよを業平朝臣のゆりて

かよとよいおしんまや雪よもかておんんとい

やよみゆり事伊勢物語又古今集雜よん

えり

は里へつくと竹の園生あくまにけれはもて
 親王を伴周と云事。正倉衣傷よゆり親王の衣を
 ちりちりあはれ伴周と云人よとよべいんれいん

いつる。車迹くるまあとの後也。かろと字也。雪よとをわすのらふ
よりして縁の詞とていわけども。唯今迄をいきてこそ
けいあそつとらわらば。茶の一本のねり奇と同一
なる也

ち維れお糸えけし内寛羅僧都坊とて奇蹟
はしよ 冬迷懐

高雄山在鳴滝西北一里

おろね路とてまらと老らくけうらの雪とまのや結ん
こし。我路の言れ。少りまこらな。世上乃雪の伴と結て。
路まこりたるやうに。我路乃言も友を結るゆへ。路
まこりしきくんとし。て。老のくらりるる車とて
迷懐也。友まらつ雪。正希雪とて。老らく。同花忘老
しよ

爐火

さゆる長つらうれ霜のつまきて消てよあり圍かやの爐火
あつらのおろは。白灰びやくはいの車也。まを灰をれい。炉中れ火の
まわりれおのつれをく消て。炉火の消ぐに成り也。
火のまゆるふつとて。さうい。つらく。みやくたるんぬ。わらり
の霜の消まかたといつら。雪よはまをく消ぬ。わら
み同一

冥白殿濱百首よ 雪將

雪あまも鳥れしう糸ねたてくみふれ末をわらやゆるほし
うらうらぬ。紫むらとつた也。茶よ。野外雪よ。猪かを
路よ。よかり。まをさうらうのうらうまをまいたるん時
よ。やまのかくせん 装ま九集
こわくよあり。今日の狩場よ。日は言あるとも。らるれ末

のまゝで残りしもの鳥のうつてのうをぬきぬき。今一
よりとむるとゆん也

性阿上人坊ゆく奇蹟傳一

佛名

く作竹のまじれぬ乃名狐使てさぞかろづれまもさると
健考は師。仏名の非伏して。ゆくとゆきりうに。ゆか
ららすまうわまうたまき人ばむを伝よとくもはよくか
くれ源経房拾雅下く作竹のみよとい。竹よ。まも。ゆも。ゆれんこ
世と。花詞の中いいつり。三世い。過去。現在。未来乃三世
かり。佛名一は。三世の法佛のゆ名をさるる也。是
をまき人罪とのうと。まもはとんといつり。まも
公乃迷いの後也。迷いんが則罪也。佛名経よ。三世乃
佛の名をよむをまて。非伏の迷いんとさまは也。非伏
は傳して。仏名れ何の役也。公事根え云。御佛名

十九日。けしより廿一日まで。三ヶ日也。或は一日も例あり。
仁壽殿の湯をさるはうはして。湯帳の中よかけて。南の
額乃向よ。又南北よ札をさる。佛像塔形をく。
佛一前小香華かまをさる。いこに地獄を乃湯
屏風とく。出居のうけ。寂勝誦乃おと。出居のまも
火積よわるとねさす。女婦これをはく。二錦いこに
まも。神衣中衣は衣をのく。山導師かろ。けしあ
づ。善人これをつとむ。かばも。ゆ乃まも。衣むこの
ふた。まもをいこ。まも。おれ方よ。山竹のゆか
トと。ついで。まもをうけて物と。善人。山導師れ肩
う。かづり也。まもをく。名謂あり。あま。滝にまも
みるかのふ。栢梨乃勸孟わとい。まも。ゆれん
右邊衛府乃領。揚津國。栢梨乃ゆ。ゆ酒

をまうて殿として勸^{かん}誡^{がい}のあり也。い佛名といひは
 二世の法佛の名号^{なごう}を唱^{なま}へて六根^{ろくこん}の罪^{つみ}を滅^{めつ}すもふ
 也。佛^{ほとけ}の佛名^{ほとけなま}経^{きやう}よりくわりの功德^{くふとく}くらうりてんや
 實^{まこと}に飛^と五年十二月よりりきまる。永和^{わいご}のけり。毎年^{まいねん}の右
 この日^{このひ}の向^{むか}ひ。法^{ほふ}國^{こく}として殺^{ころ}せ禁^{かむ}断^{だん}れり。格^{かく}よりんり。
 宣^{のたま}河^か安^{やす}とらん。江^え家^か次^じ第^{だい}并^{なら}延^{えん}喜^き式^{しき}圖^ず書^{しよ}寮^{りやう}をふ
 委^{まか}し。雲^{うん}圖^ず抄^{しやう}云^い。十二月十九日^{じふにがつじゅうくにち}佛^{ほとけ}名^な奉^{ほう}歲^{さい}末^{まつ}公^{こう}事^じ
 多^{おほ}指^{さし}合^あ之時^{とき}。或^{ある}一日^{いちにち}行^ゆ之^ゆ二^{ふた}篇^{ぺん}爲^な人行^{ぎやう}奉^{ほう}也^{なり}事^じ長^{ちやう}略^{りやく}之^{なり}
 等^ら持^ぢ院^{いん}賜^{たま}き大臣^{だいじん}家^か之^のそ 歲^{さい}書^{しよ}

久^く方^{かた}の實^{まこと}にれぬくしてとまらぬ物^{もの}と年^{ねん}やりらん
 久^く方^{かた}い。天^{あま}乃^の枕^{まくら}詞^{ことば}也^{なり}。天^{あま}のくく堅^{かた}固^こさしれ也^{なり}。天^{あま}れ國^{くに}は
 とは。天^{あま}の戸^とといふも同^{おな}し。天^{あま}の日月^{にげつ}星辰^{せいしん}の付^つ來^{きた}ありて
 日^ひ夜^や四^よ時^じ乃^の始^{はじ}り有^あり。又^{また}明^あの明^あり候^{けう}。言^いひとづか候^{けう}也^{なり}。

國^{くに}は戸^とあり。明^あくしてといひ。杉^{すぎ}ありと年^{ねん}いとまらぬ
 物^{もの}とてくして行^ゆ也^{なり}。かそつれいさほぬ物^{もの}をさうといひて
 おくはいつくもそまらぬ
後人不知
古難上 詞^{ことば}のうり候^{けう}也^{なり}。正^{ただ}每^{まい}意^い上^{じやう}せり也^{なり}。か
 たり

入^いる二^{ふた}品^{しん}親^{おや}王^{わう}家^かみ千^ちそり

をれぼふらうむり人^{ひと}のそでつともきり年^{ねん}れれか
 たる雪^{ゆき}のちばはらたそり人^{ひと}のそでつともきり年^{ねん}れれか
 をのくやうをいそぐゆとまらぬ也^{なり}。年^{ねん}をいそぐは
 まとまらぬといひり

実^{まこと}白^{しろ}殿^{との}と 歲^{さい}書^{しよ}忙^{いそがし}

惜^{おぼ}へと年^{ねん}れ終^{はつ}を人^{ひと}のいふるもいふとつり候^{けう}也^{なり}。ま
 年^{ねん}の終^{はつ}い。おれとやいびきまされぬ。人^{ひと}のいふる

かゝるに。いつの日は。成事ぞし。人ごん年のくろ
きは惜か。五月のほろけをして。まはまら。人の
く。年れく。を。い。ま。ご。ん。の。あ。き。さ。り。り

蘆堅はて 歳言

井がうで。ち。く。か。か。ふ。あ。い。と。そ。ん。鏡。の。け。い。年。事。あ。よ。も
井^幸が。あ。み。そ。こ。か。る。親。よ。向。い。の。て。み。ら。何。と。こ。を。ち。く。勢
親。く。あ。い。ら。す。り。捨^捨鏡。を。ま。い。白^白髪。の。げ。れ。さ。ゆ。か
して。さ。て。い。つ。の。ま。あ。や。ん。年。の。れ。て。我。も。老。さ。り。い。と。さ。よ
を。鏡。の。親。の。年。く。か。く。と。いつ。り。さ。れ。ど。も。そ。れ。を。も。井^井が。う
う。さ。し。て。け。い。親。と。あ。い。ど。ち。く。ぬ。く。よ。か。り。て。老。ろ。姿^姿を
髪^髪さ。り。の。け。い。ま。ま。さ。し。と。也

かゝるに。いつの日は。成事ぞし。人ごん年のくろ
きは惜か。五月のほろけをして。まはまら。人の
く。年れく。を。い。ま。ご。ん。の。あ。き。さ。り。り

